経済教室

私見卓見

ＡＩ時代に英語を学ぶ価値

愛知学院大学教授（言語学）　佐々木　真

翻訳機やスマホアプリでリアルタイムの通訳・翻訳が可能になっている。英文和訳では学生よりスマホアプリの方が優秀という場合もある。「英語でコミュニケーションが簡単にできたらどんなに素晴らしいだろう」と思い描きながら、懸命に勉強する時代は終わったのだろうか。「機械があるから勉強する必要はない」。生徒・学生のこうした声に返す言葉を、大人や教員は持ち合わせているだろうか。私は、人工知能（ＡＩ）時代であっても英語を学ぶ意義は厳然としてあると考えている。

第一に人はいつでもオンライン状態にいることはできない。通信環境が整備されていない場所ならなおさらだろう。そんな時ほど、言語でじかに意思疎通する結果が生命を左右することにもなりかねない。さらに人間関係の距離が縮まるほどに肉声を求めるはずだ。愛の告白を機械経由でされたとして、心が動かされるだろうか。

第二にＡＩにはまだ限界がある。言葉は状況や文化によって意味が変わってくる。漫画「天才バカボン」に登場する、レレレのおじさんの決まり文句「お出かけですか」を機械翻訳すればＡｒｅ ｙｏｕ ｇｏｉｎｇ ｏｕｔ？やＷｈｅｒｅ ａｒｅ ｙｏｕ ｇｏｉｎｇ？になるだろう。だが屋外で掃除をしながら人に声をかけている状況からみれば、Ｈｏｗ ａｒｅ ｙｏｕ？が適切で自然な翻訳だろう。言葉は表面上の文や語彙の変換だけでは真意を伝えきれない。現在の機械翻訳は状況や文化に左右される言語事象まで捉えて適切に訳してはくれない。

第三に特定分野における表現形式も様々だ。Ｓｕｂｊｅｃｔは英文法の話の中では「主語」だが、心理学の実験に関する内容なら「被験者」となる。医療分野の英語論文なら数行にまたがる主語を動詞一語で受けることもある。これも単純な機械翻訳では意味がわからない。複雑な名詞句の使い方と、そこから生み出される情報理解には練習のくり返しが必要だ。

言語学の専門分野である、語用論（状況と言語事象）や言語使用域（特定分野での語や表現の使用）で網羅される事象に、ＡＩは不十分だ。人間の感情的な部分に機械が介在することができない限り、英語を学ぶ価値は色あせない。

当欄は投稿や寄稿を通じて読者の参考になる意見を紹介します。〒100－8066東京都千代田区大手町1－3－7日本経済新聞社東京本社「私見卓見」係またはkaisetsu@nex.nikkei.comまで。原則1000字程度。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。添付ファイルはご遠慮下さい。趣旨は変えずに手を加えることがあります。電子版にも掲載します。